



ARGONAUTES

別府大学図書館報

アルゴノート No.57

CONTENTS

ページをめくる喜び…………… 浅野 則子
 専門図書館へのアプローチ:「スポーツ雑誌・掲載記事」の探索から… 工藤 邦彦
 「雪女」と「生と死の断片」から見る八雲の世界… 福西 大輔
 短期大学部初等教育科から40名の認定絵本士が誕生します! … 古川 元視
 別府大学附属図書館・司書課程共催 図書館見学ツアー2022 … 佐藤 晋之
 図書館リニューアル・選書ツアー



ページをめくる喜び

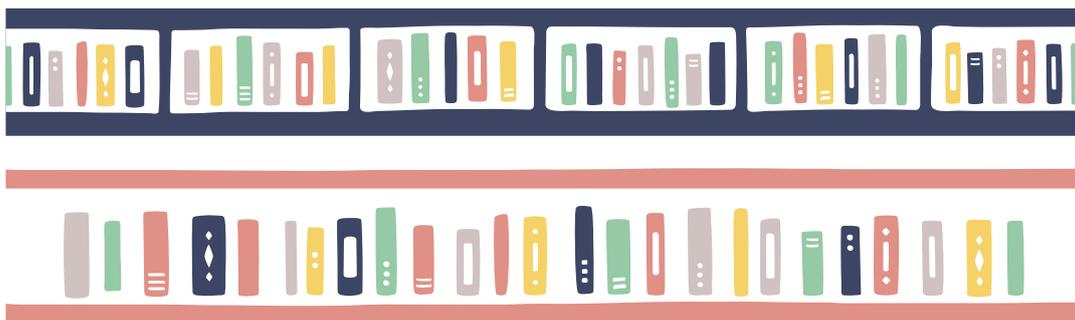
別府大学附属図書館長 浅野 則子

千年以上も前の少女、菅原孝標女は初めて『源氏物語』全巻を手に入れて読み始めた時の感動を『更級日記』にこう書いている。「はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちのうち臥して引き出でつつ、見る心地、後の位も何にかはせむ」。今まで、飛び飛びに読んでいて、話の筋も納得がいかず、じれったく思っていた物語を初めから読むことのうれしさ、それは当時の女性の最高の位としてのあこがれだった後の位すら超えているというのだ。少女は父の赴任に従い東国に下っていたが、その地で姉や継母は自分が覚えていた物語の話を楽しそうにしていたという。物語が書かれた冊子そのものにはなく、自分で覚えている部分を語るのも、少女は納得がいけない。早く全部読みたいと願った結果、帰京後やっと手に入れた物語を読む幸福感が時代を超えて伝わってくる。当時は物語を読むためには書き写された冊子を手に入れるしかなかった。紙に墨で書き写したものはそう多くはない、都以外では手に入れることはきわめて困難といっただろう。まして長編の『源氏物語』である。都にいてもすべてを手にするのは簡単ではない。今、書架の『源氏物語』を手にとると何版も重ねられている。読みたい人がいれば、何度も印刷され、そ

の人の手に渡る。私たちはこうした活字文化の恩恵に浴していることを忘れがちである。

図書館では書架に整然と本が並んでいる。その背表紙は多くの言葉を中に秘めてたたずんでいるようだ。手にとってページをめくと秘められていた活字がいきいきと語り始める。ページをめくるときめきは、指を通して感じられるだろう。読み終えて本を閉じた時の幸福感は本の重さとともにやはり手の中に残っている。『更級日記』の作者が全身で感じた喜びは、形は変わっても、まだ私たちの中にあるのではないだろうか。

近年、電子書籍が増えている。狭隘化が問題となっている図書館にとっては喜ばしい方向であろう。電子書籍で時間、空間を超えた文字が私たちには簡単に手に入ることになる。そして知りたいことが詰まっている電子書籍を手放せなくなるであろう。電子書籍の画面の中の文字に当然のように接し、それが普通のこととなっていくに違いない。電子書籍は私たちにどのようなときめきをくれるだろうか。画面を走る指のなめらかな動きはきっと画面を通した文字と結びついて新たな幸福感をもたらしてくれるであろう。こうして、千年前の少女のときめきは形を変えてこの先ずっと続いていくに違いない。





専門図書館へのアプローチ： 「スポーツ雑誌・掲載記事」の探索から

司書課程 工藤 邦彦

昨年（2022）年12月、日本体育図書館協議会が開催したオンライン・オープンセミナーにZoomで参加しました。セミナーでは「大宅壮一（おおや・そういち）文庫とスポーツ～雑誌専門図書館の資料からスポーツに関する記事を検索する方法と資料入手について」と題し、運営元である大宅壮一文庫事務局から文庫のウェブサイト上でアクセスできる蔵書検索（オンライン閲覧目録システム：online public access catalog 以下、OPACと記します。）と有料版である雑誌記事索引データベース（web OYA-bunko）の検索方法についてレクチャーを受けました。

東京都世田谷区にある本館と埼玉県の越生分館からなる大宅壮一文庫は、ジャーナリスト・評論家であった大宅（1900～1970）が集めた資料、とくに商業雑誌いわゆる大衆誌のコレクションをもとに没後も“雑誌に特化した私設専門図書館”として、マスコミ関係者を中心に幅広く活用されています。

しかしながら、建物の構造上、閉架式の図書館であるため、利用者は蔵書の有無を調べる必要があります。そのため、OPACには「資料検索」に加え「雑誌タイトル索引」があり、雑誌約12,700種類、80万冊（大宅壮一文庫ホームページによる）の書誌・所蔵情報がヒットします。さらに、約7万語のキーワード検索が可能で、スポーツ雑誌の奥深い記事まで辿ることができます。まさに大宅のいう「本は読むものではなく引くものだ」を体現した検索システムといえましょう。

ちなみに、我が国においてスポーツ雑誌を多く収蔵している専門図書館に、秩父宮記念スポーツ博物館・図書館があります。博物館と図書館が併設するかたちで、かつては東京の旧国立競技場内にありました。東京2020オリンピック・パラリ

ンピックのメインスタジアムとなった新国立競技場内での再開は叶わず、収蔵していた資・史料を仮置き（2023年現在、千葉県船橋市）のうえ、再開館に向け整備の途上にあります。しかしながら、OPACは完備されておりますので、雑誌タイトル索引で検索しますと、スポーツ雑誌のバックナンバーが豊富に揃っていることがわかります。

ほかにも特定のスポーツ、競技に絞った専門図書館として、例えば野球であれば東京ドーム内にある野球殿堂博物館図書室があります。ここでは野球、ベースボールに関する雑誌、新聞、スクラップブックと野球好きにはワクワクする逐次刊行物を数多く所蔵しています。また現在、所蔵資料のオンライン目録化が図られOPACに随時登録されているようです。

駆け足で3つのスポーツに関する専門図書館を紹介しましたが、共通するのはスポーツ雑誌の収集に力点が置かれていることです。スポーツにおける競技会や試合の結果といった一次情報だけを知りたいのであれば、ネットのニュースサイトで事足りるのですが、アスリートが競技に取り組む準備から結果に至るまでのプロセスやスポーツの持つ社会的背景を知りたい場合には、専門的な内容を扱うスポーツ雑誌の閲覧が欠かせません。

専門性をもった資料を収集、提供するのが文字通り専門図書館です。来館するには距離的、時間的な制約があるかと思しますので、PCやスマホからひとまずOPACにアクセスし、その専門性を体感してみることをおすすめします。

「雪女」と「生と死の断片」から見る八雲の世界

史学・文化財学科 福西大輔

私が民俗学に関心を持つようになったのは、小泉八雲の影響も大きい。子どもの頃、親に読んでもらった昔話の中には八雲が原作である「耳なし芳一」や「むじな」そして「雪女」もあったと思う。

学生時代、日本各地を旅して歩いたが、鳥根県松江市を旅した時、何気なく小泉八雲の旧居を訪ねた。そこで改めて小泉八雲という人物に関心を持ち、「雪女」などの話が、彼がまとめた『怪談』という短編集の一つの話だと知った。その後、東京の多摩地域で学芸員として勤務した際、八雲の書いた「雪女」の舞台が、雪深い東北山間部ではなく、東京の多摩地域（現在の青梅市あるいは調布市）であることを知った。このことは、今も多くの日本人が勘違いしていると思う。

私は縁あって、次は熊本で学芸員として勤務をはじめることになった。この土地も小泉八雲も所縁の場所だった。八雲が松江の次に住んだのは熊本で、彼は第五高等学校で、英語を教えていた。こうしたこともあり、私は、熊本での八雲の足跡を追いながら、彼が熊本での出来事を書いた「願望成就」や「停車場にて」、そして「生と死の断片」などを読んだ。

その中でも「生と死の断片」の一文を私は何度も読み返すことになった。それは民俗学の学芸員として、熊本で今も盛んな造り物の文化を理解するためだった。造り物とは、祭りの飾り物の一種で、陶器や金物、野菜など日用品を素材として動物や建物、物語や芝居の一場面を再現するものである。八雲は「生と死の断片」の中で、地蔵祭りの時に自分の家の前に蜻蛉の造り物が子どもたちの手によって作られたことを紹介している。

（前略）蜻蛉の胴体は色紙でくるんだ松の枝であり、四つの翼は四本の十能であり、きらきら光る頭は小さな土瓶であることがわかった。しかも、ひどく変わった影が出来るようにおいた蠟燭の光に、蜻蛉全体が照らされていて、その

影も考案の一部になっているのだった。これは、美術的な材料が少しもなくても立派にやれる芸術的感覚のおどろくべき例であって、しかもこれはすべて、わずか八歳の貧しい子供が骨折ってこしらえたものである。

これを読み、自分が勤務している博物館で、熊本の造り物文化を紹介する展示として、小泉八雲の文を手掛かりに蜻蛉の造り物の再現を試みた。明治25年に書かれたことをふまえ、当時の材料に近いものを集め、八雲が書いた描写から展示業者の力も借りながら作った。ところが、幾ら正確に作っても工夫しても「芸術的感覚のおどろくべき例」にならないのである。

どうやら、小泉八雲の文が、現実のものよりも読者に立派に思わせていることに原因があったようだ。八雲の「雪女」の舞台が、東北山間部の豪雪地帯の物語として、多くの人に勘違いされ続けるのも彼の文が成せる業なのかもしれない。実物よりも文章が勝る良い例が小泉八雲の世界なのだろう。

※本文で取り上げた「生と死の断片」は、田代三千稔訳の『日本の面影』に収録されているものによるが、もともとは『東の国から』に収録されたものである。



短期大学部初等教育科から 40名の認定絵本士が誕生します！

初等教育科 古川元視

1 認定絵本士とは

絵本専門士委員会（絵本に係る有識者からなる委員会）〔事務局：国立青少年教育振興機構〕（以下委員会）では、大学や短大等の授業の中で学ぶことのできる『認定絵本士』養成制度を創設し、平成31年4月からスタートさせている。認定絵本士養成制度は、教育課程に位置付けられた授業科目の中で、委員会が定める「認定絵本士養成講座カリキュラムに関するガイドライン」に基づいた講座（30科目（コマ）、50.5時間）を開講し、学生がその講座が含まれる授業科目の単位を修得することにより、委員会が認定する「認定絵本士」を取得することができる制度である。

認定後は、講座で学んだ幅広い知識や技能等を活かし地域や職場で、絵本の魅力や可能性を伝え地域の読書活動を充実させる役割が期待されている。

別府大学短期大学部初等教育科では、保育者や教育者を養成しており、この制度を活用して、絵本の専門家を養成したいという願いから令和3年度から開設することにした。（実際に授業を実施するのは令和4年度からである。）

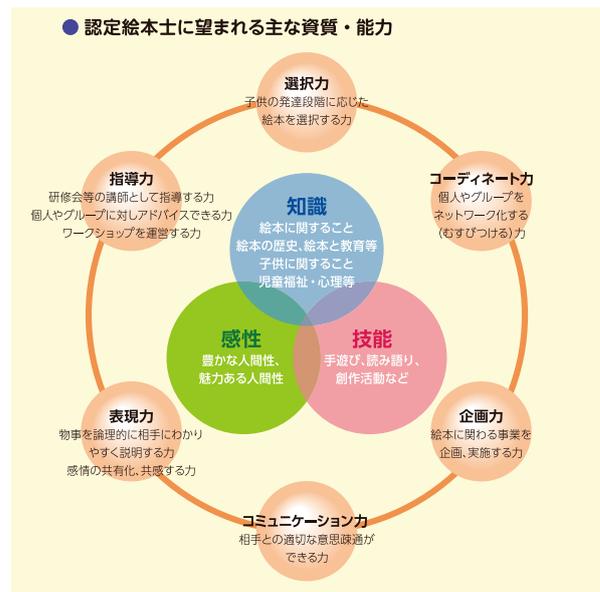
初等教育科では、保育士資格、幼稚園教諭2種免許、小学校教諭2種免許にプラスして、2年間で認定絵本士の免許も取得できることは、学生にとって大変有意義なことである。

では、実際に委員会が認定絵本士に望むどのようなカリキュラムを委員会が考えているのか見てみよう。

2 認定絵本士養成講座カリキュラム

認定絵本士に望まれる主な資質・能力は、右図のように選択力、コーディネート力、企画力、コミュニケーション力、表現力、指導力の6つの力であり、そのために「知識」「技能」「感性」を育む認定絵本士養成講座カリキュラム（下図）を委

員会は作成している。このカリキュラムに沿って、テキストが作成されており、各大学は30コマの授業を実施する。



■ 認定絵本士養成講座カリキュラム

分野	科目(コマ)名	科目(コマ)数	時間
知識を深める 12科目(コマ) (20時間)	絵本論	5	9.5
	絵本の体系・ジャンル	3	4.5
	絵本と出会う	4	6
技能を高める 8科目(コマ) (14.5時間)	絵本の世界を広げる技術	3	5
	絵本を紹介する技術	3	5.5
	おはなし会の手法	2	4
感性を磨く 8科目(コマ) (13時間)	絵本の持つ力	1	1.5
	心に寄り添う絵本	1	1.5
	絵本のある空間	1	1.5
	子供の心をとらえるもの	1	1.5
	大人の心を豊かにする絵本	1	2
	ホスピタリティに学ぶ	1	1.5
	絵本が生まれる現場	2	3.5
	オリエンテーション	1	1.5
ディスカッション	1	1.5	
合計		30	50.5

出典：(独)国立青少年教育振興機構「認定絵本士養成講座」リーフレット（2023年(令和5年)1月）

3 本年度の本学の授業内容

表1のように30コマの授業は、毎週金曜日の4限目に「子どもと絵本」という名称で実施している。本学教員とともに、公立図書館長、絵本作家、絵本店主など、12名の専門家をゲストスピーカーに迎えて授業を行っている。特に、絵本の専門家であるゲストスピーカーの授業は、学生にとって

初めて出会う魅力ある人々であるため、話に引き込まれ、目を輝かせながら聞いている。

回	日程	内容	授業担当者
1	4月8日	オリエンテーション	古川元規
2	4月15日	絵本総論【知識】	古川元規
3	4月22日	絵本の世界を広げる技術①【技能】	衛藤智美
4	5月6日	絵本論①【知識】	渡邊輝美
5	5月13日	絵本の世界を広げる技術②【技能】	佐藤真由美
6	5月20日	絵本論②【知識】	渡邊輝美
7	5月27日	絵本の体系・ジャンル①【知識】	石川千穂子
8	6月3日	絵本の世界を広げる技術③【技能】 ・絵本を提案する技術 ・絵本にかかる情報収集と整理	河瀬裕子 (九州布の絵本連絡会代表)
9	6月10日	絵本と出会う①【知識】	笠崎まゆ

表1 令和4年度「子どもと絵本」授業内容及び担当者
(一部抜粋)



おにコーンの部屋

<ゲストスピーカーの授業の感想>

今日は、絵本を作るまでの工程や作る大変さについて学ぶことができました。私が今まで読み聞かせて読んでいた本には作者の意図があり、めくっているページには作者の思いのこもった絵が入っていることに改めて凄いことだということが分かりました。



ゲストスピーカーの授業風景

4 大学図書館絵本の部屋「おにコーンの部屋」の改造

大学図書館を「子どもと絵本」の授業で活用したいと考え、大学図書館の改築に併せて絵本の部屋「おにコーンの部屋」として位置付けることにした。(「おにコーン」という名前は、令和2年度専攻科2年生が「別府のおに+大学中庭のユニコーン」から名付けた。)委員会が発行しているテキストに記載されている絵本や初等教育科幼稚園と小学校担当者が選んだ「別府大学短期大学部初等教育科 絵本100選」の絵本なども購入した。

5 令和4年度 受講生のアンケートの結果から「子どもと絵本」の授業終了後に38名の受講生にアンケートを取った結果の一部を紹介する。

(1) 絵本の好き嫌い

図1は、「絵本は、好きですか」という問いの回答である。「とても好き」「好き」で100%であり、受講前と比較すると、「とても好き」が17.2%増えている。これは、受講することで、絵本の様々な魅力に触れた結果であると考えられる。

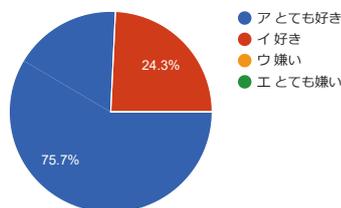


図1 絵本の好き嫌い

(2) 絵本の読書経験

認定絵本士受講後は、「とても読んだ」「読んだ」で100%になり、「とても読んだ」が35.9%も増えている。これは、教員やゲストスピーカーが授業中に絵本を紹介したことや「別府大学短期大学部初等教育科 絵本100選」を設けたことが効を奏したと考えられる。事実、「おにコーンの部屋」で受講生がよく読書をしているところに遭遇した。

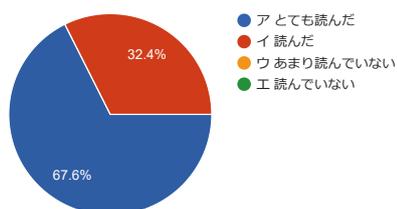


図2 絵本の読書経験

(3) 認定絵本士の資格取得の理由

やはり、「絵本が好きだから」「子どもたちに絵本を読んだり、読書活動をしたりたいから」が多かった。その他では、「教員として子どもたちに絵本を紹介したいから、もっとたくさんの絵本を知りたいから」などが挙げられた。授業中に受講生が実際に絵本を手にとったり、ゲストスピーカーが紹介したりなど、受講生が絵本の良さに触れたからだと考える。

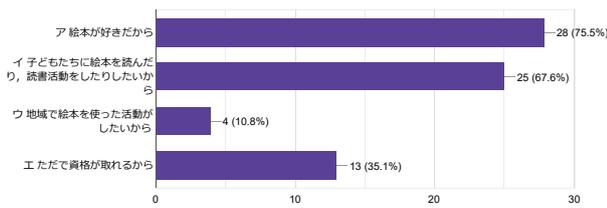


図3 認定絵本士の資格取得の理由

(4) 認定絵本士取得後にやりたいこと

対象者が、子どもだけではなく、保護者、同僚にも絵本に関する活動をしたいと視野が広がったことが分かる。その他では、「就職先が絵本を取り入れた保育を行っているので、その活動に参加したいから」などが挙げられた。

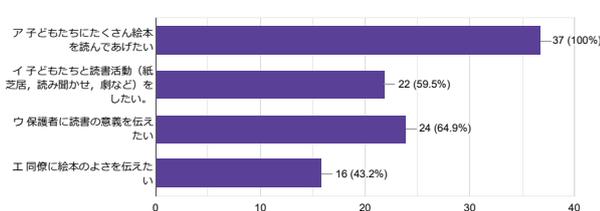


図4 認定絵本士取得後にやりたいこと

(5) 受講前と受講後で絵本に関して意識が変容したこと

変容したこととして、「絵本は大人も楽しめる!」「絵本に対する見方や考え方が変わった」「初めはただ絵本が好きで絵本についてもっと知りたいと思い、授業に参加していました。今は絵本の魅力や大切さを学び、たくさんの人に絵本を読んでもらえるように自分に出来ることをしてみようと思っています。」「絵本と一言で言っても、作家や出版社の方、司書など様々な立場の人がいて、それぞれの角度からお話を聞いたことは大変有意義でした。それぞれの人がそれぞれの分野で一生懸命に仕事をして、一冊の本になるという当たり前のことですが、何となく知っているのでは

なくきちんと学べて良かったです。」などの記述があった。絵本についての知識が増え、感性が豊かになり、視野が広がっていることが感じられる。

(6) 受講中の1年間で読んだ絵本の冊数

1年間を通して、受講生にはたくさんの絵本のシャワーを浴びて欲しいという願いもあった。ゲストスピーカーも本学教員も授業中は多くの本を紹介した。受講生の1年間の絵本の読書冊数は、表2のとおりである。最低55冊、最高377冊であった。絵本を知っていることは、就職後の選書や読書活動にも繋がっていく。

表2 1年間で読んだ絵本の冊数

絵本の冊数	人数
1～100	6
101～200	21
201～300	8
301～400	5

6 終わりに

大分県で初めて認定絵本士養成機関となった初等教育科において「認定絵本士」取得予定の40名がこの3月に卒業する。卒業生の高瀬郁佳さんは「授業の中で一番心に残ったのは、絵本は幼少期の発達と密接な関りをしているということです。これから私は、園で働くので、子どもが絵本と関わる環境を整えたり、保育の中で活かしたりして子どもが楽しく絵本に触れあうことができるようにしたいです。」と思いを語ってくれた。

卒業後は全員が、小学校や幼稚園・認定こども園・保育園等に就職し、幅広い知識や学んだ技能を活かして絵本のすばらしさや魅力、そして本の可能性を伝え、読書活動をより活性化させる「絵本の伝道師」としての活躍を期待している。

認定絵本士養成講座のチラシ

別府大学附属図書館・司書課程共催

図書館見学ツアー 2022

司書課程 佐藤晋之

2022年10月8日(土)、別府大学附属図書館と司書課程の共催で図書館見学ツアー(以下、見学ツアー)を開催した。見学先の選定は、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響を鑑みて県外施設を自粛し、県内施設を検討した。また、公共施設である図書館が地域の中でどのような取り組みを実施しているのかを学ぶため、観光施設が近隣にある図書館に絞ることとした。その結果、昭和の町や宇佐神宮などの観光資源に恵まれており、2013年に開館した豊後高田市立図書館を見学することにした。参加者は、学生37名、教職員5名(うち引率教職員3名)の計42名だった。参加者には、旅のしおり及び口頭にて、見学先の感染対策を遵守するよう呼びかけた。秋晴れの中、地域に根づく図書館の取り組みについて学びを得ることのできた一日だった。本稿では、2022年度の見学ツアーについて報告する。

見学ツアーの行程は以下の通りである。大学を午前8時30分に出発し、午前9時45分に豊後高田市立図書館に到着した。2時間の図書館見学を終えて、昭和の町に移動し、昼食を兼ねて散策した。最後に、宇佐神宮を参拝した。当初、宇佐神宮の滞在を2時間と予定していたが30分繰り上げ、午後5時15分に帰着した。

見学内容は、ホールにて施設概要の説明が行われ、2グループに分かれての館内見学があった。その後、ホールに集合し、スタッフによるエプロンシアターの実演や館長及びスタッフによる質疑応答の時間が設けられた。参加学生らは、エプロンシアターのクオリティの高さに魅了されていた。質疑応答においても率直な質問が飛び交い、図書館で働くことや地域における図書館の意義について理解を深めることができた。

アンケート調査の結果を報告する。アンケート調査は、Google Formsを利用し、引率教職員3名を除く参加者39名を対象に行った。回答数は、

29名(74.4%)だった。アンケート調査の概要を表1に示す。

表1. アンケート調査概要

	回答数	
	R4年度(n=39)	R3年度(n=29)
全体	29名	16名
学生	27名	13名
教職員	2名	3名

アンケート調査の項目は全20項目を設定した。以下では、主な項目について結果を示す。

見学ツアーの開催時期についての結果を表2に示す。昨年度は11月下旬での開催で卒業論文や定期試験期間のため都合が悪いとの意見があり、今年度は10月初旬の開催とした。しかしながら、後期が始まって間もない時期のため、告知が十分ではなかったとの意見があった。今後は、授業内告知や学内でのチラシ貼付のみではなく、情報発信に注力すべきだと考える。

表2. 見学ツアーの開催時期はどうでしたか？

	良かった		悪かった	
	R4年度(n=29)	R3年度(n=16)	R4年度(n=29)	R3年度(n=16)
人数	27名	15名	2名	1名
割合	93.1%	93.8%	6.9%	6.2%

行程についての結果を表3に示す。昨年度同様にほとんどの参加者らにとって過不足のない時間配分ができたと言える結果だった。一名の学生から「何をすればよいか分からず戸惑った」との意見があった。事前学習のために『旅のしおり』を

配布しているが、より分かりやすく充実した内容を検討する必要がある。

表3. タイムスケジュールはどうでしたか？

	良かった		悪かった	
	R 4年度 (n=29)	R 3年度 (n=16)	R 4年度 (n=29)	R 3年度 (n=16)
人数	28名	15名	1名	1名
割合	96.6%	93.8%	3.4%	6.2%

見学先についての結果を表4に示す。すべての参加者が「良かった」という結果だった。主な意見は、「初めて行くところで新鮮だった」や「自身ではなかなか行くことがなかった」とあり、別府市近郊ではあるものの多くの参加者が初めて訪れた場所だった。そのため、「別府市以外の観光地や図書館での取り組みを学ぶことで、進路選択の視野を広かった」や「心惹かれる図書館は他県にしかないと思っていたが、これを機に近隣の図書館に訪れてみたい」など新しい発見があったことや興味を喚起されたことが分かる意見が得られた。



表4. 見学先はどうでしたか？

	良かった		悪かった	
	R 4年度 (n=29)	R 3年度 (n=16)	R 4年度 (n=29)	R 3年度 (n=16)
人数	29名	16名	0名	0名
割合	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%

アンケート調査の結果を概観すると、ツアー内容が概ね好評だったことや参加者それぞれにおいて学びに繋がることがあったことが分かった。今後の課題としては、企画の周知や趣旨説明など情報発信について工夫が必要だと考える。また、司書課程履修者以外の学生にも参加を促す方策についても引き続き検討したい。

最後に、図書館見学ツアーを受け入れていただいた豊後高田市立図書館の皆さまに深謝申し上げます。



1階に引き続き、附属図書館2・3階をリニューアルしました

令和4年3月22日に図書館2階をActive Floor(アクティブフロア)、3階をLearning Floor(学習フロア)としてリニューアルオープンしました。令和3年にリニューアルした1階に引き続き、学生がより快適に利用できる図書館を目指しました。

企画展示やイベントも行い、多くの学生にご参加いただきました。学内からも展示依頼をいただき、宇宙港に因んだ展示や附属博物館との連動企画を実施することができました。

<企画展示> ☆…イベント ★…展示

3・4月	★その時代を象徴する本 ☆「未来へ展」
4月	★ブラインドブックフェア
5月	★新生活フェア
6月	★雨の本
7月	★レポート・論文お助け本 ★スタッフおすすめの本
8月	★怖い本
9月	★温故知新 ★“古い物”展示
10月	★宇宙への一歩 ☆本の重さを当てよう ★ハロウィン本展示
11月	★心の栄養本 ☆朗読会 ★朗読会関連本の展示 ★特集：宮本常一
12月	★福袋本
1月	★レポート・論文お助け本 ☆図書館おみくじ
2月	★学生選書の本 ★猫の本
3月	★映像化作品特集



第13回 選書ツアーの実施

選書ツアーとは、学生が図書館に置きたい本を選ぶ図書館企画です。昨年同様、書店訪問とオンラインの2通りの方法で行いました。また、今年度よりゼミ単位での参加を受け付けました。

書店訪問は2022年11月23日(水)から12月7日(水)、オンラインは2022年11月14日(月)から12月7日(水)の間で実施し、合計16名の学生、ゼミ1組にご参加いただきました。選書本は学生ご本人にPOPを作成してもらい、1階にて展示をしました。今後も学生参加型の企画を行っていききたいと思います。

1階展示コーナーにて展示

